

Title	一、パピルス學の現状
Sub Title	
Author	森, 馨(Mori, Kaoru)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.1 (1938. 8) ,p.89- 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	海外史壇紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380800-0089">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380800-0089</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 海外史壇紹介

### 一、パピルス學の現状

森

馨

(オックスフォード第五回  
國際パピルス學大會の概況)

オックスフォードに於て、昨年八月三十日より九月三日にかけて開催された第五回國際パピルス學大會は斯學の進歩のために幾多の功績を残して、大成功裡に終つたことはわれわれの記憶になほ新たなところである。

Historische Zeitschrift, Bd. 157, Heft 2, S. 309-318. 1937, XII. — には、ドイツより大會に参加したミュンヘン大學古代史教授 Walter Otto 氏が、"Zum heutigen Stande der Papyrologie" と題して、大會の有様を報告し、それを通じて世界のパピルス學の現状を紹介せんとしてゐる。「數多くの講演とグループに分れた集會にあつて、私人の報告者に出來得ることは、只その概觀を紹介するだけであるが、それにしても大會の豊かな成果を充分明にするには足らぬ」と教授自身言つてゐるやうに、たとへば紹介された報告の中、フランスは僅かに一人、イタリヤについては全然ないといふことは淋しくも

あり、不思議な點でもあるが（尤も佛伊側より報告がなかつたなら別であるが、會議には英獨語と共に佛伊語が用ゐられたと記されてゐる）、短い文によく標題の目的を達してゐると思ふ。教授の論述紹介の概要を記したのが本稿である。

今より百年にもならぬころ、W. Adolf Schmidt 教授はギリシヤ語パピルス文書に關する論文の初めに、從來言語學も古代史學も、なんらパピルス文書の與へんとする效用を享けようとしてゐないことを嘆いてゐるのであるが、そののち五十年を経ても、なほパピルス學は古代研究の重要な獨立の一部門をなしてはゐなかつた。その價值、その意義が根本的に認められるに至つたのはその後のことであるが、これが最も切實に表はされたのは一九三三年、ミュンヘンで催され、成功をもつて終つたパピルス學大會に於てであつた。言語學、史學、神學、法學の學徒によつて行はれた大會の講演を通じて、すべて古代研究の一つ一つの枝が、それぞれパピルス學の大な幹につらなつたもので

あり、この科學を通じて各々の枝に豊かな實の結ばるべきことが一般に示された。演壇に立つた人々の中には、ひとり古典語學者のみでなく、エジプト語やアラビヤ語學者も數へられ、パピルス文書に用ゐられた言葉の多種類にわたつてゐることが世人の注目を惹いたのも、またこの時であつた。

かくして最近五十年間には、パピルス學は古代研究の最も重要な補助科學の地位を與へられ、常に多趣多様の史料と、既知未知、大小とりどりの貴重な古書とその斷簡を提供した。そしてこれらは、中世の手寫による古代文獻の傳承の正誤、といふよりも寧ろ一般的について傳承の純粹に、後世の改竄の尠いと思はれる點について、從來よりも遙に確實な回答を與へた。英米の著名なパピルス學者による古い聖書の斷簡の發見によつて、前二世紀の手寫になる舊約の民數紀略と申命記と、後二世紀前半に屬する手寫になるヨハネ福音書の斷片

が、書物の體裁をなして世に現はれ、これらが現在の聖書と根本的に全く一致してゐることを示して、吾人を驚かしたことは最近のことである。

今次のオックスフォード、パピルス學大會の參加者は約百七十人、英米人が多數をしめたことは當然のことであるが、歐洲の各地、またアジア、アフリカよりも來會し、その代表する研究の領域も史學、言語學をはじめ、神學、法學、考古學に及び、古典文化は勿論、東方研究のやうな廣い範圍にもわたつてをり、パピルス學の多面性は残りなく示された。ドイツからの出席者はベルリン大學ローマ法教授 Paul Koschaker 氏を主班とする十五人であつたが、特に惜しまれたことは、ドイツの最も誇るべき斯學の耆宿 Ulrich Wilcken 教授の不參である。大會總裁 Sir Frederic Kenyon は開會に際し、これを最も遺憾とし、老教授に深甚の敬意を表されたのであるが、これは出席者一

同の満腔の同意をもつて迎へられた。

大會の成功は多くこのため、準備に、進行に、絶大な努力を惜まれなかつた諸委員の力によることは勿論であるが、また他の町と獨り離れたオックスフォードの靜かな空氣、新しい精神に結びつけられた古い學問の傳統に負ふところも大であつたとしなければならぬ。各國からの、この小さな大學町の滞在者達はすぐ親しみあひ、重要な個人的意見の交換も私的交驩を通じて隔意なく出來た。Bodleian Library のパピルス文書の陳列、Merton College の中世期の圖書館の縦覽は參加者を悦ばしめたとともに、これらの場所はパピルスの發掘と科學的研究の上に巨大な足蹟を残した二人の共勞者、Grenfell と Hunt の當時の働き場 Queen's College、貴重な寶物を藏する Ashmolean Museum、古い歴史を誇る St. John's College などと、講演や社交的集りの好ましい會場として用ゐ

られた。尤も、大會の學術的眞摯さは、ここに結ばれ温められた個人的親交や、社交的空氣に少しも損はれることなく、文字通りの Arbeitstagung に終始したことは、從來と異るところはなかつた。大會は總會と、毎朝二つもしくは三つ併行して行はれる部會によつて進められた。講演の申込は六十を下らず、その中、とりやめとなつたものもあつたが、それに代つて、豫め申込まれてゐなかつた講演が行はれるといふ有様であつた。總會においては、九つの講演が七ヶ國の人々によつてなされたが、ドイツからは Walter Otto 教授が選ばれて、書物として書かれ、編纂されたもの以外のパピルス文書、オストラカ文書の將來の公刊の態様について述べ、専門以外のものはその量の夥しさの故に近よることも出來なかつたパピルス文書の史料を、この新方法によつて一般に利用し易くしようといふ趣旨のもとに、種々の提議をした。公

刊についての強い協力の必要が強調されたとき、  
會場は贊意の拍手の音につままれた。

前回と同じくオックスフォード大會に於ても、  
新しい資料が澤山提供され、解説された他、既知  
のものにも新しい研究報告が加へられた。これら  
の中、最も重要な意義をもつものはO. J. Kraemer  
と L. A. Mayer とによる報告であつた。これは  
一九三六年、アメリカのユルト調査隊の発見にな  
る、南パレスチナの *Aujel-Hafir* のパピルス文  
書である。その一はギリシヤ語で書かれた、後六、  
七世紀に屬する書物をなしたものと記録をなした  
パピルス文書であり、他はこれと同時代のもので  
*Vergilius* の *Aeneis* 第四卷のラテン・ギリシヤ兩語  
の對譯註解書と、これにつゞく時代に屬するギリ  
シヤ・アラビヤ兩語對照とアラビヤ語の記録であ  
る。以上の *Aeneis* の註解書は比較的後の時代迄、  
パレスチナ地方にラテン語の學習の行はれたこと

を示すもので、エジプト地方に於ては、後六世紀  
に屬するラテン語のパピルス文書の、極めて稀れ  
にもか發見されぬことと思ひあはせて、デオクレ  
チヤヌス帝以來、後四、五世紀頃、ローマ帝國のギ  
リシヤ化された東部邊疆地方を過つて打ち寄せた  
ローマ文化の潮は、六世紀にはエジプト地方より  
再び流れ去つて行つてしまつたことを示すものと  
して、注意すべきものである。(Wilcken, *Atti del*  
*IV. Congr. intern. di Papirologia*. S. 122) これ丈  
を以てして、それ以上の推論を敢てすることは許  
されないが、少くともこのことは尙、次の問題を  
われわれに提出する。即ち東方地方に、殊に長い  
間優越的地位をしめたギリシヤ語も、ともすれば  
之に代らんとして擡頭してくる其の地方の本來の  
言葉に脅されてゐた當時に、ラテン語が再びこの  
地方に學ばれたについては、ユスチニアヌス帝の  
法典編纂が幾分なんらかの刺戟を之に與へてゐる

のではあるまいか、といふことである。尙この場合注目すべきことは、古くより有名な Herkulaneum 文書とユーフラテス河畔 Dura-Europos で近く発見されたものと並んで、エジプト以外の地方で中世以前の優秀なパピルス文書の出たことである。われわれは之によつて圖らずも大なる希望を與へられる。古代地中海文化圏内のあらゆる國々の跡に、またこれを超えた地域に、なほ將來パピルス文書の屢々発見されんことを期待し、これに依つてヘレニスティック文明下のエジプト研究に示した偉大な貢献を、エジプト以外の地方にも現はし、それらの國々の歴史を燦然とした光明の中に引き出してくれることのあるのを信せんとするのは、われわれの空しい幻であらうか。更にエジプト以外の地で出たこの記録は、アレキサンダー大王の時代より始まる古代の終りの部分に於て、地中海文化圏内の文化の均一性、多様性の度合につ

いて、重要な示唆を與へるものである。

この他、新史料として提供された數多い文書については、到底その全部をここに紹介することは出来ない。一例を示せば、書物としてのパピルス中には、ピンダルス、ツキヂデス、聖書、acta Pauli の斷簡と古い基督教の祈禱文、ユプト語のマニ派の著名な書、後四世紀のウルピニアヌスの斷簡、等、等であるが、この最後のものはデイゲスタ中に文字通り同じに保存されてゐるもので、短文ながらエスチニアヌス帝の編纂により、ウルピニアヌスがどれ丈、改竄されずにあるかを示すものとして、大切である。

ジュネーヴの Victor Martin は、後三五〇年頃 Faiyum に駐屯したローマ士官 Flavius Abinnaeus の多くの通信文について述べた。ロンドンとジュネーヴにあるこの士官の尨大な書信と事務書類の大蒐集からは、屢々興味ある發表が行はれたが、

われわれはマルチン氏と Bell 氏によつて約束されたこの一大文庫の公刊の速かならんことを望んで已まない。そのほか、前二世紀の末、一世紀はじめに屬する、上部エジプト Pathyris よりの、一家庭の記録書類中のギリシヤ語とデモティック語を併用する文書に關する報告によつて、當時のその地方の民族問題を知ることが出來、同じ家の他の記録により、クレオパトラ三世の前一〇一年の死は、可成り正確にその年の十月の初めか、遅くともその前半であることを證してゐる。Sir H. Thompson の講演に引用されたトレミー時代のデモティック語の文書には、古代の宗教、經濟社會史上に著しい役割を演じつゝ、その性質の未だ明かでない「神に屬する奴隸」*ἱερόδουλος*に關する、重要な新史料が提供された。Dura-Europos の軍事的記録書類中の、從來一部分しか知られてゐなかつたパピルスについて、Rostovtzeff 教授の門弟、

英國の A. S. Hoey は深い研究報告をした。このパピルスには、Alexander Severus 時代の軍用曆が含まれてゐる。この中には兵營で祝はれた國祭日、純粹な軍事的な祭日、澤山の皇帝の祭日が極めて完全に書き殘されてゐる、帝國の最東端に位するこのユーフラテス河畔の曆で、しかもその性質の最もローマ的であることは、政治的にもまた文化的にも興味深いものである。アメリカの C. B. Welles は一文書を通じて、ローマ軍の内情を解剖し、ネロ帝末期のエジプト駐屯ローマ軍團の狀態を詳論したほか、なほ今迄知られなかつたエジプト領外 Kypern の碑文に言及し、その中にある、前二世紀のトレミー朝の王 Energetes 二世の大赦令は、トレミー帝國の内部的基礎の脆弱性と當時の軍事的要素の意義について新しい説明をなすものであると指摘した。

トレミー朝の内史については、更に二つの講演

がこの歴史上の大問題に、探究の矛を差し入れた。W. L. Westermann, *The Ptolemies and the Welfare of their Subjects.* と Claire Préaux, *La signification du règne II. d'Évergète* いづれも屢々最近取扱はれたトレミー朝の政治組織の本質に關して、新に寄與するところの多いものであつた。但し、ここでも、貨幣に現はれたローマ皇帝の政治綱領を論ずる場合の如く、この時代の文書に強く現はれてゐるヘレニスティックの國王としての理想を盛つた布告が、果してどの位迄たしかに、之によつて王と人民との關係が把握されるか、布告に現はれた王のもろもろの美德は、眞實を表はしてゐないのではあるまいか、といふ疑問に遭遇する。アウグスツス時代のエジプトについては、R. Syme が最初のエジプト知事 Cornelius Gallus の素性と關聯して、アウグスツス時代の支配階級中の新分子の勃興について述べ、H. I. Bell はネロ帝治下のエ

ジプトの經濟的危機について發表した。エジプトの行政についても多くの報告が行はれた。就中興味をひかれたのは、行論に假定の多いのは別として、Heichelheim の、僅かこの二十年前に世に現はれた古代印度の國家學、Kautilya の *Artha-sāstra* に關する報告と關聯して、トレミー朝の行政の印度に與へた影響の研究であつた。これもまた直接に、ヘレニズム下の東方地方が、その内に相互間の密接な文化交流を保つた一大文化ブロックであつたか否かの、ヘレニズムの本質に關する重要な問題に關係して來るのである。

比較法制的立場より講演をしたのは *Das Griechische Recht* である。教授はローマ法に存する副保障の觀念はビロニヤのキロス一世の時代にもまたローマ治下のエジプトにも認められるとし、更に新バビロニヤとエジプトの慣習を比較し、その背景をなす經濟的類似を述べ、その他エジプト法制につ

いて詳論した。Leopold Wenger はパピルス文書に現はれた法理論を紹介し、Koschaker はアラビヤ語パピルス文書によつて、アラビヤに於ける婚姻締結書式のビザンツやユプティック・パピルス文書のそれと何等關係のないことを明にした。文學史についてはブダペストの Kerenyi によりギリシヤの小説が扱はれ、宗教史については前述の神につく奴隸や初代基督教會のやうな問題の他、ノールウェーの S. Eitrem により *στροφή* と *δαμάς* の觀念について論せられた。考古學については、アメリカのホルト調査隊の南パレスチナに於けるビザンツの建築の發見とポーランド人 Manteuffel の Edfu の發掘が報告され、又オックスフォード郊外の Chedworth に、後三〇〇年頃のローマの別墅の跡を訪れるために、大會の遠足が催された。居館や經濟的用途に供された建物の趾によれば、これは仲々立派なものであり毫も文化的衰退を示して

ゐない。殊に注目すべきは、經濟的目的のために作られた種々な煖房装置である。すべては飾氣のない灰色の石が用ゐられてゐるが、これは現在もオックスフォード郊外の町々の地方色の基調をなしてゐる建築石材と同じものであるやうに思はれる。

## 二、フィリップ二世の性格に關する新研究

平 山 榮 一

(Revue historique, Tome CXXXIX, Avril-Juin, 37.  
Memoires et Etudes 所載 Léon-E. Halkin 氏の論文 La  
physionomie morale de Philippe II, d'après ses derniers  
biographies.

スペイン王フィリップ二世は史上の最も異論ある大人物の一人である。彼の名をめぐつて過去三百年來展開された論戰は、少しも彼の名聲を擧げ、或は神祕的な威嚴を加へることにならなかつた。

チャールス五世とポルトガルの一王女との間に